

モテ酒のススめ

北原伸一

Shinichi Kihara



イラスト／永美ハルオ

号欲しさにこの計画に乗じ、貪るように読みまくるのだろう。

そして掲載されている商品は高価すぎやしないかという、現実に一瞬引き戻されるものの、人生の先が見えたという焦りと、馬車馬のごとく働いてきた自負心から、雰囲気だけはあやかれないかと試行錯誤を繰り返す、鏡の前でポーリング。雑誌とはどこが違うという戸惑いながら「ちょい不良オヤジ」のパラドックスに陥ってしまう。

果たして、気が付けば色気づいたおじさんたちが、街でも見受けられるようになった。

それにしても勘違いしてるおじさん、多くない？ それ違うんじゃないでしょうかとクビをかき上げたくなるおじさんも悲しいかな、いたりする。好意的に見ても「健気」っていう範疇を逸脱している。

ついこのあいだ銀座で見かけた男性。ハデな真っ赤なスカートをクビにまきつけて闊歩しておりました。まさに真紅のスカーフ。ちよつと違うんだよなあ、『LEON』と。「真紅」が「辛苦」だ。それじゃあ、熱帯にいる「チョウウベイサンゴヘビ」ですよ。

(チョウウベイサンゴヘビ) 爬虫類有鱗眼ヘビ亜目、メキシコ東端から北西端に分布。全長100cm以下。森林に住む。赤、黄、黒の帯が輪になってつらなるはでな体色は、有毒であることを相手に知らせるための警戒色：出典・ヤフーきつず図鑑

「ちょい不良オヤジ」と「カッ」悪オヤジ

雑誌の影響からか、巷間では、「ちょい不良オヤジ」なるフレーズが流行って久しい。その流行を作りあげた雑誌『LEON』（主婦と生活社発行）の勢いは止まるどころを知らず、4月号では「モテるスーツはキザ艶」へグレー×コトンのスーツで春は艶トラ（艶やかなトラッドのこ

と?) デートへモテるオヤジのチラ魅セログバググ……と、積極的に「日本全国、モテるオヤジが、づくり計画」を遂行している。

書類の山に囲まれて、寒い部屋で半纏羽織りながら、こうしてせせと当て字にルビをふっっている筆者は『LEON』からかなりの遠いところにいるんだなとしみじみ。

かたや今まで「おやじ」と呼ばれ煙たがられた人たちは、「ちょい不良」の称



そうか、毒があったんだ、あのおじさん。どうりでテカテカしていた。
最近よく見かけるようになったノーネクタイのサラリーマン。おじさんたちにも浸透し始めている。これだって、若者

文化に迎合、いえ、この場合、媚びる、いや若者ぶっているわけで、「ちょい不良オヤジ」を意識しているはず。でもでも年齢が首に出てますよ。しわしわ、カメみたい。おまけに丸首の白いシャツ(ダ

ンゼですか?)に郷愁を誘われるなあ。鼻毛も伸びてたりして。

こう言っただけなんです、ジローラモ(「ちょい不良オヤジ」の代表格)『LEON』のモデルだからカッコいいのであって、イタリア人だからスーツがさまになる。欧米文化が入り混じった環境で育った若者は、外国人と遜色なくなつたかもしれないが、日本人のおじさんはそうはいかない。

厳肅に耳を傾けよう 女性たちの貴重な「ご意見」

ではモテることをあきらめなければならぬのか。女性にモテる……、通常の男性であれば誰しもそうありたいと願うはず。はるか昔のいにしえ人たちも、いかに女性にモテるかを常に考えていた……に違いない。

カッコ悪いとあきらめる?
「ちょい不良オヤジ」と程遠いから背を向ける?

いえいえ、「モテ酒」があるじゃないですか。

「モテスーツ」がある以上「モテ酒」もあるはず。ただここでは「モテ酒」のニュアンスを都合よく、曲解してしまおう。普通に考えるなら、流行は細身のシルエットの「モテスーツ」といったようにモノとして解釈するのだが、それでいくと

「モテ酒」は、シングルモルトやマティニー、これを飲んだらモテる」といった酒の種類を指すことになる。でもここではあくまで、酒の飲み方によって醸し出す、カッコよさを追求することを「モテ酒」と呼びたい、誰が何と言おうが。さてさて、ではどうしたら酒の席でカッコよさを醸し出し、「モテ酒」といなるのだろうか。あわせてどんな酒を、どんな酒場で飲んだらいいのか。

ハイハイ。つたない人脈をフル活用。難攻不落の女性軍の貴重な意見をまとめてまいりました。

これさえ読めば貴方も今日から「モテ酒オヤジ!」(なんかこの言い方はカッコ悪い……)。

まずは「飲み方・態度・仕草編」から。

「会話中にさりげなく、そして伏目がちに強い酒を口に含む」(27歳)

「お酒が強い人。でも酔ってグダグダになるのはNG」(28歳)

「酒を飲む際、グラスに唇が近づき、その唇がタコのように突き出したとき」(25歳)

……本当だろうか。まっ、中には変わった女性もいますですよ。

「強いお酒を飲める人。男のクセに弱いヤツは問題外。ジェスチャーが激しくなく、落ち着いて飲める人。聞き上手ならなおいい」(24歳)

「煙草を持っている手でロックグラスを持ち、そのまま飲み干す。もちろんその

時、ひじは付いたまま。バーボンXYZを飲んでくれるとぐっとくる」(32歳)

残念。「XYZ」はラムベース。にわか知識だったかな。「XYZ」はアルファベットの終わりということで、最後のカクテル。これ以上ない最高のカクテル」という意味を持つ、ラムとキユラソー、レモンジュースのいたってシンプルなカクテル。

「とにかく酒の強い人。私のお酒の弱さを判っていないながら勧めてくる。その余裕がステキ」(21歳)

「手がキレイな人の仕草。例えば煙草を吸ったり、グラスを持つさま」(24歳)

「さりげなく、私のグラスを気にしてくれて、『次何飲む?』っていう気遣い」(27歳)

「身の丈に合った店で楽しく。金額でなくうまい酒を知ってて、グルメならなお良し」(23歳)

「右手で料理をしながら、左手で飲む。アウトドアやホームパーティとか大人数の中で目立たずにやるつのが、ポイント。妄想して萌えちゃう」(27歳)

「黙して語らず。でもこちらが気を使うほど無口はダメ」(50歳代)

「グラスの淵を上からかぶせるように持つて、ひじをついて話す。私はもちろん隣の席」(35歳)

「コロナみたいな小瓶を飲む人。レモンとかライムを人差し指で入れるとこ」(33歳)

「着物で熱燗」(34歳)

「何度も目が合ったりすると気になる。自分からはメアドとか聞けないので、さりげない素直なアプローチに魅力を感じる。その時はあまり酔ってないでほしいな」(29歳)

「自分は飲めなくても『ドンドン頼みなさい』と言ってくれる人。もちその人のオゴリ」(27歳)

うくん、チャッカリしてる。「お気に入りのバーとかがあるとカッコいい」(28歳)

「自分が喋るのではなく、相手の話を聞く姿勢で飲む。無言で飲んでいる方がカッコいい」(32歳)

「フアージーネブルを飲んでたら、オレンジつながりでミモザなんか注文されたりしたらちよつと惹かれるかも」(34歳)

「このお酒、凄く美味しいから飲んでみて」と勧められるといい。スツツ姿なら3割増よ」(29歳)

続いて「場所編」。「暗めの照明で、BGMはジャズ。ソファで隣に座り、夜景があればなおいい」(23歳)

「夜景のきれいなスイートで、ソファにもたれ、リラックスしながら飲む。カジノとかアリだな」(29歳)

「お酒落すぎると落ち着かないので、ほどよくステキでくつろげるお店。美味しいお店がいい」(31歳)

「台湾の屋台、牢屋、リゾート地の夕方

から夜にかけての海で飲む」(27歳)
……聞き流しましょう。

「安すぎず、高すぎないお店。お酒の種類が豊富で落ち着いたお店」(32歳)

「暗めの照明(下から)間接照明を上手く利用しているソファテーブルがあるお店」(28歳)

「バーで飲むショット。といっても雑誌に掲載されるような流行りの店や、割引クーポン券が付くような店でなく、小さなバー」(42歳)

「ワインバー。それでワインの種類に詳しい人はステキ。前菜はこのワイン、メインはこれ、デザートはこれと料理ごとに適したワインを選んでくれる人ってカッコいい」(28歳)

「照明を落としたバーだと、2割カッコよく見える」(27歳)

ついでに、こんなヤツあ、問題外という「ダメ男編」もどうぞ。

「ビールなどを一気に飲みまして、ゲップする人。大量に飲むことをカッコいいと勘違いしているおバカさん」(31歳)

「ヤケ酒につき合わせる。カクテルばかり飲む。甘いお酒を飲むのはイヤ。酔って暴れるのは言語道断」(26歳)

「酔うとネガティブになって愚痴る人。やたら触ってくる人。ウンチク野郎に自慢男」(32歳)

「注文しようとするが漢字が読めない。すらすら読めない」(26歳)

モテ酒のススメ



ここで大御所に登場していただく。新宿で40年営業している老舗バーのサブマネージャーが「モテ酒」を教えてください。「これっていう仕草は無いんです。その人の持つ雰囲気、えも言えぬカッコよさを醸しているときがありますよね。それは、仕事がうまくいったり、プライベートが充実していたり、バイオリズムの関係でしょうね」

「こぼす人」
(30歳)
「合コンなどの初対面なのに、予約なし十大衆居酒屋をチョイス、その上でカクテルを飲む人」
(30歳)
「合コンの席上、女の子の気を惹きたいのか、遠くを見つめるしぐさ。『具合悪いのかな』って思っちゃう」(29歳)
いかがでしたか。話を聞かせていただいて恐縮ですが、結構、勝手なことを言っています。

名画のなかには「モテ酒」がたっぷり

カッコいい「モテ酒」といえば、銀幕のスター。カッコいい俳優がグラスを傾ければサマになるのは当たり前。そのままでも滑稽になるだけ。だが、話題のタネにも使えるし、あえてコミカルに演じれば、充分「モテ酒」になるはずだ。さて、映画といっても、酒を飲むシーンには数多ある。その中でも、カッコよさでナンバー1は、不朽の名作「カサブランカ」ではあるまいか。
第2次大戦のナチス占領下のカサブランカでの大人の切ない愛を描いた作品だというのは、ご存知だろう。ハンフリー・ボガート演じるリックが、かつての恋人、イングリッド・バーグマン扮するイルザと再会した時の回想シーン。あまりにも有名な「君の瞳に乾杯！」(Here's looking at you, kid)のセリフ。都合4回発言するところを見ると、リックの決めセリフか。いえいえ、このセリフはイルザだけに言うセリフに違いない。
冒頭シーンも有名だ。リックに擦り寄る美女・イヴォンヌとの会話。
イヴォンヌ「ゆうべはどこに？」
リック「そんな昔のこと覚えてないね」
イヴォンヌ「今夜会える？」
リック「そんな先のこと分らないね」
こんな臭いセリフ、背中越しにさらっと

言ってサマになるのはやはりボギーだけ。ところで、「君の瞳に乾杯！」というセリフが有名になった理由には、リックの人情家らしい人柄が伝わってくるというベースがあるから。
イルザと再会を果たした夜、イルザを待ち1人灯りの消えた店内で泥酔の醜態を晒す。愛する女性を想うあまり自暴自棄になり、ここから回想シーンが展開されるのだが、こうした男の感情が露わになったからこそ、「君の瞳に乾杯！」ってセリフが生きてくる。
さて、この言葉、我々が使うとしたら……。止めておきましょう。おどけて言うならともかく、真面目に言う酔ってもないのにに赤面状態。
究極的にカッコいい「モテ酒」が登場する映画があった。
伊丹十三監督の「お葬式」である。映画そのものは俳優の奥村公延扮する雨宮真吉の葬儀をコミカルに仕立て、大ヒット。冒頭シーンで雨宮真吉が心臓発作で倒れ、そのまま他界する設定だが、その直前、東京から帰宅の際、購入してきた好物のうなぎとアボカドを肴に焼酎のお湯割りを飲む。ごくごくありふれた日常生活風景だが、その後人生の終わりを告げるということになるとするなら……。最期の晩餐が好物を肴に酒を飲む——こんなカッコいい酒の飲み方は他にはあるまい。